

ハチオシ!



八尾といえば、

やっぱり河内音頭!

八尾の夏の風物詩といえば、河内音頭。盆踊りシーズンを前に、今あらためて「河内音頭」をおさらい
していきましょう!
文化・スポーツ振興課 TEL 924-3909 FAX 924-3788 ID 1011498



今月の市民モデルさん

河内音頭に親しむごきょうだいでの撮影でした。踊りのポーズを次々と提案してくれて、息の合った動きはさすが!「きょうだいで一緒に撮影できて、良い記念になりました」とお母さんも笑顔で話してくれました。



各記事の詳しい情報は、市ホームページのページID検索に ID 7桁の番号 を入力すると、ご覧いただけます。



今に伝わる、 河内音頭のルーツ

現在、盆踊りなどで親しまれている河内音頭は、戦後に生まれました。その原型とされているのが、北河内で歌われていた「交野節」です。

明治初期になると、歌亀うたかめという音頭取りが、交野節のメロディーに字数にとられない歌詞をのせた「歌亀節」を考案。これが北河内から中河内に広まり、大阪市内の寄席よせでも演じられるようになります。やがて、滋賀県発祥の江州音頭こうしゅうと区別するため、歌亀節は「河内音頭」と呼ばれるようになりました。

戦後、河内音頭は大きく変化します。浪曲の節回しに西洋風のリズムを取り入れた「浪曲音頭」が流行し、さらに昭和30年代にはギターなどの楽器を取り入れた「民謡鉄砲節」のレコードが大ヒット。これをきっかけに河内音頭の名は全国に広まり、伴奏にもエレキギターやキーボードなどが加わるようになります。現在、市内の盆踊りで主に歌われているのはこの昭和30年代以降に誕生した河内音頭です。
(出典 八尾市史)



第1回八尾まつり



第3回八尾まつり記念郵便カード
「新版八尾市史民俗編より」

伝承音頭と、儀礼としての盆踊り

現在の河内音頭が普及する以前より、河内地方にはさまざまな音頭が伝承されてきました。そのひとつが、常光寺に伝わる「流し節」。河内地方最古の音頭といわれ、最初に「河内音頭」の名前でレコード化された歌でもあります。その「流し節」が今も歌い継がれている常光寺は、一説に「河内音頭発祥の地」とされています。今回はこの地に伝わる盆踊りについて、お話を伺いました。

常光寺の「流し節」は、室町時代に寺を再建する際、材木を運んだ時の木遣り歌が起源とされます。流し節正調河内音頭保存会会長の谷岡さんによると「口説きといって、物語を流れるように語り歌うのが特徴」。現在も『八尾地藏霊験記』など8種類ほどが歌い継がれています。

盆踊りはもともと死者の追善供養のための儀式でしたが、時代とともに一般的な娯楽として広まったと考えられます。常光寺の八尾地藏盆踊りもかつては夜通し行われ、地域の歌自慢たちがこぞってやぐらに上がったそう。上手な人には御幣ごしるべのほか、バケツなどの日用品も授けられたそうです。



自身も音頭取りを

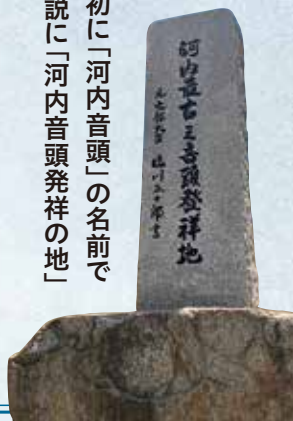
務める常光寺の片岡住職は「流し節は伴奏がなく、太鼓のみ。耳で覚えて歌うのですが、これが難しくて」とその奥深さを語ります。それでも、



常光寺住職 片岡英悟さん(左)と、流し節正調河内音頭保存会会長 谷岡隆宏さん

600年以上受け継がれてきた伝統を後世に残すため、現在は月3回の練習のほか、地域の子どもたちへのお稽古も実施。谷岡さんは「子どもたちが将来、ここで踊った記憶をきっかけに八尾を懐かしんだり、帰ってきてまた一緒に踊ってくれたらうれしい」と未来への希望を語ります。

片岡住職によると「八尾の人間にとって、河内音頭はソウルミュージック」。お盆だけでなく、身近な催しとして定着していると言います。その中でも常光寺の八尾地藏盆踊りでは今も、やぐらの四方に竹を立て、五色旗ごしるべを掲げ、宗教行事としての姿を守り続けています。「近年は娯楽の多様化や少子化もあり、盆踊りへの参加は減少しています。それでも、地藏盆踊りは儀礼として執り行わなければならない行事。毎年8月23・24日は盆踊りを続けていく、それが地域に根ざした私たちの使命だと感じています」。



踊ってみよう！河内音頭

流れるように
優雅な

手踊り

反時計
まわりに
進む

⑧⑨の手は、上になる手は伏せて、
下になる手は手のひらが上になる
「合わせ返し」がポイント！



活発で
躍動的な

マメカチ

手の中に豆を持っているような
イメージで、両手を軽く握って
踊りましょう！

時計まわりに
進む

